

## 連載 わがままな宝石たち⑥ ダイヤモンド・クイーン わがままな王族たち

エッセイスト 岩田 裕子

ロンドン・オリンピックが開催される今夏のグレートブリテンおよび北アイルランド連合王国(英国)。この華やかな年に、現女王、エリザベス2世は、ダイヤモンド・ジュビリーを迎えたのです。ジュビリーとは、歓喜、祝祭の意味。ダイヤモンド・ジュビリーとは、ダイヤモンドの祭典、即位60年を祝う記念式典のことなのです。英国史上、在位60年をむかえた君主は、エリザベス2世の父の父の父の母にあたるヴィクトリア女王ー在位64年の記録をもつーとエリザベス女王だけです。

御年86歳、26歳で戴冠し、イギリスを含め、英連邦(オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、パバマ、ジャマイカなど)16国家の君主となったエリザベス2世。

若い時の凛とした姿、責任感にあふれた女王も美しかったですが、今の女王はより自由で優雅そのもの。色彩感覚に優れた国イギリスの王者らしく、アイスブルーやショッキングピンク、レモンイエローなどカラフルなドレスを召され、女王という希有な立場でなくても、みんなうるうに自由に軽やかに年をとれたらーと心からあがれてしまうのです。

ダイヤモンド・ジュビリーを祝い、今回は、英国王室とダイヤモンドの物語をとりあげてみました。

### シャーロット王妃…期待どおりの王妃の趣味

今から、250年ほど昔、ダイヤモンドの女王とよばれた、英國の王妃がいました。

英國王ジョージ3世の妃、シャーロット・ソフィアその人です。ジョージ3世は、エリザベス2世からさかのぼること、8代前の国王です。

1761年、ドイツ・メクレンブルク・ストレリッツ家の姫シャーロットは、王妃探しに奔走していた侍従武官により見出され、17歳で英國王の妃となりました。ふくらりとしたほほをもつ清楚な美貌。控えめな姿勢。王はひとめで、シャーロットを気に入ったのです。

夫のジョージ3世は6つ年上の23歳、積極的に改革を断行する、英邁で誠実な王でした。時は、産業革命まだなか。蒸気機関車なども発明され、この時代のイギリスは、世界を一変させたのです。

シャーロットは、期待通りの王妃でした。つねに謙虚で、夫と仲がよく、二人の間には9男6女、15人の子供が授かりました。理想的な王妃でしたが、ただひとつだけ常軌を逸して好きなものがありました。ダイヤモンドです。

シャーロットは、結婚あたり、王から数々のダイヤモンドを贈られました。そのなかに、ひとつわざとおる巨大なダイヤモンドがありました。「カンバーランド」という名の、三角形のダイヤモンドです。この33キャラットの巨大なダイヤモンドは、まるで夢に見た惑星のカケラみたいに美しく、まだ若かったシャーロットを変えていました。

それ以来、彼女には、ダイヤモンドのない人生など、考えられないものとなつたのです。夫のジョージ3世から、臣下から、またインドの太守たちから、すばらしいダイヤモンドがシャーロットにふりそそがれることになりました。

王妃のダイヤモンド好みをめぐり、大事件も起きました。初代インド総督のヘースティングスが、インド産の101キャラットもあるダイヤモンドを賄賂として国王に献上したという噂です。

王妃はダイヤモンドに目がないのですから、これは大いにあり得る話です。

ヘースティングスは否定しましたが、無罪になると7年もかかり、職も財産もなくしました。しかし、このダイヤモンドは他の場所にあり、確かに国王のもとに届きました。巻きこまれたことで、彼の名がついたダイヤモンド「ヘースティングス」は、結局、シャーロット王妃のコレクションに加わります。一つ間違えば、マリー・アントワネットのように、王妃への断罪になりかねない事件でしたが、日頃のイメージがおとなしいので、危うく難を逃れました。

この事件以外、とくにめだつこともなく、後世に影響を与えることなかった王妃ですが、たったひとつだけこの世に残したものがあります。

エタニティ・リング。永遠の愛の証しとして、結婚記念日に贈られるこの指輪を発明したのは彼女でした。愛する夫から贈られた貴重な指輪を落とさぬよう(キープするため)、銀のリングを重ねてつけたのです。しかし、ダイヤモンド好きの王妃は、輪の周囲に小粒のダイヤモンドをぐるりとちりばめたりました。そうしてみると、なんてかわいい、気品に満ちた指輪でしょう。それは、キーパー・リングと呼ばれました。しかし、愛を象徴するダイヤモンドをちりばめた魅力から、次第に、永遠の愛—エタニティ・リングと名を変えたのです。シャーロットのこの指輪は、現在もウインザー城に保管されています。

王妃は、王と終生仲良く暮らしました。王の父も、息子たちも女遊びが大好きでしたが、



イラスト 岩田 裕子

ジョージ3世は、一生、妃だけを愛し続けたのです。幸せな結婚から生まれたエタニティ・リングは、時空をこえ今も、現代の女性たちの、永遠の愛を見守っています。

隣国の王妃、マリー・アントワネットと同じように、ダイヤモンド好き、政治には無関心、かわいいタイプの美女でした。シャーロットのほうは、平和のうちに、その74年にわたる人生を終えました。

### エドワード7世 ダイヤモンドの王様

ジョージ3世とシャーロット王妃の孫に当たるのが、かのヴィクトリア女王。ヴィクトリア女王の長男がエドワード7世なのです。

1901年、ヴィクトリア女王の崩御とともに、英国はエドワード7世の時代を迎えました。禁欲的なヴィクトリアンが過ぎ去り、優雅で贊沢なエドワーディアンが幕を開けたのです。母王の治世が長かったため、王はすでに59歳。

たった9年の短い在位でした。しかし陽気で遊び好きなエドワードは、皇太子のころから、国内外の人気者だったのです。

競馬に夢中で、戴冠式をダービーの日程に合わせようとしたという噂。

葉巻を愛好し、嫌煙家の母の時代が終わる直後、「諸君、吸おうではないか!」と宣言した、という逸話。

パリの享楽的な雰囲気を好み、フランス人に「魅力的な王」と呼ばれた王は、恋多き人で、有名な女優や貴婦人をはじめ、生涯に101人の女性との付き合いがあったといいます。しかし、一方で王は、優れた外交手腕を發揮し、日英同盟や英露協商なども締結して

いたのです。

気品あふれる妃、英國史上、もっとも美しい王妃とよばれたアレクサンドラは、デンマーク王の息女でした。妃は夫の浮気に悩みながらも、やんちゃなその性質を終生、愛し続け、「エドワードがカウボーイであっても彼を愛したこと」を毅然と言い放ちました。

人気者の王と美しい妃。この華やかな時代に生まれた宝石は、天界に舞い降りた雪のように美しい、典雅なジュエリーでした。プラチナにダイヤモンドを配した、上品で華奢な白いジュエリー。幾何学的なデザインに、薔薇や百合、月桂樹や麦の穂、リボンなどのモチーフ。プラチナには、繊細な模様を打ち込む「ミル・グレーン」という技法が施されました。

贅沢好きな王の好みを反映した、繊細でエレガントなエドワーディアンスタイル。市民階級に多くの芸術家を輩出したヴィクトリアンと違い、きわめて貴族的で、洗練され、ゴージャスだったのです。

今も残るエドワーディアンのジュエリーは、もう二度と戻ってこない、華やかで贅沢な時代の息吹をわたしたちに思い出させてくれるのです。

### エリザベス2世 ダイヤモンド・クイーンの初恋

エドワード7世のひ孫にあたるのが、エリザベス2世です。

昨年、春爛漫の季節、ウィリアム王子とキャサリン妃のロイヤルウェディングに沸いた英國。若き新郎新婦以上に人々の目をひきつけたのが、プリンスのおばあさまにあたる、エリザベス2世でした。

夫君フィリップ殿下のエスコートのもと、壯麗な馬車から女王が降りられた時、周囲に光がさっとふりまかれたような、すごいオーラを感じたものです。周囲から主役の若いふたり以上に歓声がわき、その人気ぶりをあらためて感じました。

真赤な陸軍の軍服にブルーのサッシュをまとった夫君、エдинバラ公フィリップ殿下(当時89歳)もまた、堂々たる姿です。高齢であるこの幸せと華やぎー世界中にそのお手本となってみせてくれている、世紀のロイヤルカップルです。

ウイリアム王子の結婚式からさかのぼると64年の昔、同じウェストミンスター寺院にて、おふたりも華燭の典をあげました。

今でこそ、ウイリアム王子のような同級生同士の結婚に誰も驚きませんが、かつての王族は、ほとんどが政略結婚でした。しかし、ふたりはちがつたのです。

その出会いは、1939年7月にさかのぼりま

す。当時の英國王ジョージ6世夫妻は、王室ヨット「ヴィクトリア&アルバート号」にて、ご自身の母校、ダートマスの王立海軍大学を訪問したのです。二人の王女、13歳のエリザベスと9歳のマーガレットを連れて。

このとき、国王一家のエスコート役に任命されたのが、この大学に在籍していた18歳の士官フィリップ・マウントバッテンだったのです。長身と金髪、きりりとした顔立ち、青く澄んだ瞳が印象的な将校は、国王のまた従兄マウントバッテン卿の甥にして、ギリシャとデンマークの王子でした。

王女つきの家庭教師がこのときのエリザベスについて、こう語っています。

「王女さまは、フィリップ殿下から目を離しませんでした。」

彼は、まだほんの子供に見える王女たちを「テニスコートにいて、ネットをとび越えて、遊びませんか? 楽しいですよ」と誘ったのです。そして自分で、テニスコートのネットを何度も軽々と飛び越えて見せました。王女は、あんなに高くジャンプするなんて、素晴らしい素敵なお方ね。」と釘付けになっていたようでした。と家庭教師。ダートマスの港を王室ヨットが離れるとき、甲板には、双眼鏡を手にしたエリザベスが、フィリップ殿下をいつまでも見つめていた、ということです。

その後、ふたりは文通を始めます。戦争が始まると、エリザベス王女の机の上には、従軍生活で無精ひげになった王子フィリップの写真が飾られていたということです。

1945年、長かった第二次世界大戦は、英米の勝利に終わり、海軍将校フィリップも、英國に戻ってきました。

翌年、夏も終わりのころ、エリザベス王女は、お気に入りの静養地、スコットランドのバルモラル城に滞在していました。バルモラル城は、周囲を森や莊園に囲まれたイギリス王室所有の保養地です。

そのお城をフィリップ殿下が訪れ、王女に結婚を申し込んだのです! 何という喜びでしょう。エリザベスは、ほほを染め、即座にオーバーしてしまいます。本当は、国王夫妻に相談してから返事をしなくてはいけなかったのに。

フィリップ殿下から贈られたエンゲージリングは、3キャラットのダイヤモンドの周囲を5つのダイヤモンドが取り囲んでいる、プラチナ台のものでした。

この指輪に使われたダイヤモンドは、もともとはフィリップ殿下の母上、ギリシャのアンドリュー王妃のティアラにはめこまれていたものでした。それを、殿下自身が、この形にデザインされたのです。殿下の婚約者へ捧げる深い愛情が感じられます。



イラスト 岩田 裕子

出会いから8年、エリザベス王女とフィリップ海軍中尉は結婚しました。王女は、愛らしいウェディングドレスに4メートル半もあるヴェールをまとい、まるでお伽噺のなかの姫様のようにみえたのです。

5年間後、父君ジョージ6世が崩御。エリザベス2世女王陛下が誕生しました。重い責任を担ったエリザベスを、フィリップ殿下は、今も変わらず支えづけています。

コスチュームに、カリナンI、II、III、IV…名だたるダイヤモンドをいくつも所有しているエリザベス2世ですが、一番のお気に入りは、今もフィリップ殿下から贈られた、3キャラットのダイヤモンドだということです。

### 近況

電子書籍を発売します。  
PHPスペシャル( PHP研究所 )に1年3ヶ月連載していました「蟲惑のジュエリー」が、「電子書籍」になりました。

7月中旬に発売にされる予定です(これを書いている現在は、制作中)。「三島由紀夫 曙の寺」や「吉佐和子 悪女について」などに登場する宝石の物語。ご覧いただけましたら、うれしいです。

PHP研究所デジタル書籍  
<http://www.php.co.jp/digital/>



岩田 裕子 (いわた ひろこ)

「宝石とは、美しさ、そして夢」と考え、様々なキーワードー ギリシャ神話から名探偵ボワロ、バレエや競馬、ビーター・パン、王女さまに魔術までー を駆使して、宝石の魅力を解き明かしている。

慶應義塾大学西洋史学科卒業後、編集者を経て、エッセイスト。宝石に関する著書は、「夢見るジュエリー」「ダイヤモンドAtoZ」(共に東京書籍)、「宝石物語」(大和書房)、「21世紀の冷たいジュエリー」(柏書房松原)、「恋するジュエリー スターが愛した宝石たち」(河出書房新社)など。ほかに、妖怪、花の本、絵本の翻訳も。

<http://www.shinjukutoyama.com/page1.php>